

らい 来ぶらり 15

第52回IFLA東京大会に参加して



国立劇場での開会式

●世界の図書館人がやって来た

国際図書館連盟(International Federation of Library Associations and Institutions: IFLA)は、1927年に創設された世界で最も有力かつ権威ある図書館人の国際組織で、ユネスコ等関連諸機関と連携しながら、各国間の協力関係を形成し、同時に図書館の全分野を対象として、図書館相互の拡充・発展に努めている。本部はオランダのハーグにあり、123カ国1,100余の機関が加盟している。日本の加盟は1929年。年1回、統一テーマを定め、加盟国の1つを主催国として大会が開かれている。前回のIFLA年次総会は、シカゴで開催された。

第52回IFLA東京大会は、8月24日から29日まで、東京の青山学院大学を主会場に、63カ国から約2,000人が参加して行われた。主会場以外でも、国立劇場での開会式と全体会議、日本青年館でのIFLA専門プログラム公開討論会と閉会式、ホテ

ルニューオータニにおける展示会及びレセプション、それに開催国の図書館事情を視察するプロフェッショナル・ツアーなど、様々なプログラムが組み込まれ、大会を盛り上げた。

●“21世紀への図書館”テーマに

開会式は、25日午後、国立劇場で開かれた。大会組織委員長永井道雄、IFLA会長P. H. ゲー両氏のあいさつに続き、皇太子殿下が大会に寄せる期待を述べられた。今回のメイン・テーマは「21世紀への図書館」、サブテーマは「ニューメディアの影響」「情報利用における国際協力」など10項目。式後、主テーマに沿った基調報告「学術情報システム—統合された情報サービス」(日本)、「図書館と時代」(中国)、「図書館情報学における南北の対話」(シンガポール)がなされた。その後、26—27日を中心に8部会32分科会に分かれて、200余の分科会発表が行われた。

日本で初めて開かれた今大会は、①文化の集積地としての図書館、②情報拠点の中心地としての図書館、③先進国と発展途上国との関係、などに鋭い意識のメスを入れ、その可能性についての報告と意見交換の場であったと言える。ただし、アジア・アフリカ諸国からの参加者が少なく、「図書館」という概念それ自体が、欧米の発想なのでとは考えてしまった。

来年から再び開催地はアジアを離れ、ブリストル、シドニー、パリ、ストックホルム、モスクワと移動する。

Viva IFLA!

(洋書係 鈴木宗一)

文学散歩の秋

一日白周辺・山の手



現在の面影橋付近

〈秋風の吹きわたりけり人の顔〉（鬼貫）

暑い休暇も過ぎて、めっきり秋めいて来た一日、目白周辺・山の手文学散歩と酒落てみよう。まず当大学構内の旧富士見茶屋跡に芭蕉句碑がある。〈目にかかる時や殊更五月富士〉と刻まれている（文化7年建立）。目白界限は明治末頃までは田畑の点在する武蔵野の一部で、池袋などと共に北豊島郡高田町に属していた。鈴木三重吉主宰の「赤い鳥社」が大正15年まで目白上り屋敷高田町にあった。彼は喘息の持病を治すためか、学習院馬術部の特別会員になり、毎週馬場に通ったという。当時の目白付近には中国の革命家孫文も寄宿生活していたそうだ。千登世橋を過ぎ、南蔵門から面影橋へ。この橋には薄幸の美女にまつわる伝説がある。この辺りから早稲田一帯にかけては往時、「山吹の里」と呼ばれ、農家の少女が太田道灌に山吹の一枝を捧げた話は有名だ。早稲田南町には、所謂「漱石山房」跡がある。漱石はここで明治40年から数々の名作を朝日新聞に連載したが、『明暗』を未完の遺作として50才の生涯を終えた。山房跡に漱石の愛猫の墓と称するものが残っていて、

昭和27年に復元され「猫塚」として除幕式が行われたという。さて、穴八幡神社から早稲田大学へ。早稲田は大正時代は家も粗らで、冬は狐の鳴く寂しい土地だったらしいが、昭和3年頃には一面の茗荷畑も姿を消し、家並みのぎっしり詰まった町になっていた。早稲田大学構内奥には演劇専門博物館がある。坪内逍遙の『シェクスピア全集』40巻の翻訳完成を記念して建てられたものだ。演劇と言えば、大正時代「カチューシャ」の唄で一世を風靡した松井須磨子の墓が新宿の多聞院にある。師であり愛人でもあった島村抱月の病死後、34才で後追い死を遂げた純粋さは恋愛至上主義者の共感と呼んだという。次に、目白通りから鬼子母神へ。霊験あらたかなこの神社を大正7年に訪れた島本赤彦は、〈武蔵野の芒の榮買ひに来ておそかりしかば灯をともしにけり〉と詠んでいる。さて、漱石、抱月、八雲など有名な文人の数多く眠る雑司ヶ谷墓地については次の機会に譲り、最後に目白在住の現代作家、森内俊雄氏の初期の中篇「春の疾走」(昭和55年刊『骨川に行く』)のページを繰ってみよう。安保闘争の年に早稲田を卒業したものの、川村学園裏の下宿で鬱々と無為の日々を過ごす主人公の心情が、当時の目白界限の風物と溶け込んで、茫々とした人生の時間を紡ぎ出す。喫茶店「窓」、「若竹」、「ノーブル」などのスナック（現存?）などを懐かしく想起される人も多いことだろう。さて、この慌ただしい文学散歩が諸氏の〈灯下親しむ〉のきっかけになることを祈って筆を置く。〔参考文献：野田宇太郎『文学散歩（東京山の手編）』（運用課長 境 経夫）



西三号館裏にある芭蕉句碑

『年中行事五十番歌合』(国文所蔵) 貞治5年の成立。判者は為秀、作者は二条良基など23人で、百種の公事を詠んだ五十番の歌合。今回購入したものは寛文頃の写本とみられる絵入の3巻本。320万円。

書物の風景 14

中学生の夏休みに、田舎の父の家で、押入の中に古ぼけた『世界文学全集』を見つけた。「それは円本だ」と父は言った。濃い緑のハードカバーで、背が白地の布クロスにつる草模様で飾られたその「全集」を、再び当館の書庫の中で見つけた時、私は大変懐かしかった。その後、円本の事を「出版事典」「文学辞典」などで詳しく調べて

えんぽん
円本・新潮社『世界文学全集』
当初全38巻、四六判、上製6号
2段組み、1冊平均500ページ

成功に次いで、新潮社が『世界文学全集』で50万部を越す大成功を収めた。

みた。円本とは——昭和の初めに大量生産の方式により、1冊1円の廉価で予約出版された全集類の俗称である。当時、出版界は第1次大戦の終結、大正12年の関東大震災に伴う恐慌により、一大不況に見舞われていた。その打開策として、改造社社長山本実彦の創案により同社が『現代日本文学全集』（当初全38巻・大正15年11月）の発行を開始した。これが震

災の煙滅による出版物の不足、また大衆文化主義にもかない、出版界・読書界に歓迎され、異常なブームを巻き起こした。その当時、市内一円の乗車料金を1円均一とするタクシーが円タクと呼ばれたが、これと同様に1冊1円の全集本が円本と俗称され、手頃な値段で人気を呼んだ。改造社の円本の35万部という

この両円本を皮切りとして、円本の種類は200種を数え、文化の全領域にわたり、出版史上にいう円本時代が現出した。それから50数年、第1巻ダンテ『神曲』に始まる円本・新潮社『世界文学全集』は、かつて出版界・読書界に華やかにデビューしたそんな過去の面影もなく、当館書庫の中で、全巻そろった姿のまま、静かに眠りにについている。（受入係 奥田孝之）



「オルゴールに興味ある？」と図書館のカウンターで聞かれたのが約1カ月前。宝石箱と、くるくる回るお人形のオルゴールぐらいしか知らず、それ程強い関心を持っていたわけではありませんでした。しかし、「うん、行ってみよう」と思っ

て先日行って来ました。「博物館」というと、なんとなくとても静かで、厳粛な雰囲気や皆さんは連想されるかもしれませんがね。しかし、そこは吹き抜けて太陽の木もれ日がまぶしいとてもすてきな所でした。まるで夢のような世界。そして円シリンダーオルゴールの部屋、円ディスクオルゴールの部屋、円オルガンの部屋、円ピアノの部屋にわかれており、それぞれの特長がとてもいかされています。

ところで皆さんは、昔、オルゴールはレコードのような役割をしていたということをご存じて

すか？ディスクと呼ばれるものを換えることによっていろいろな音楽を聴くことができるのです。音はとてもロマンチックで、音の世界に吸い込まれてしまいそうなくらいです。

ひととおり見終わって、コーヒーを飲みながら、コイン式のオルゴール（今でいうジュークボックスのようなもの）を聴いていると、『風と共に去りぬ』のあのスカーレット・オハラも聴いたのかな？という思いにかられました。お友達同士でちょっと行ってみませんか？（文京区目白台3-25-14 ☎03(941)0008 土・日曜日の午後のみ開館（予約制） 入館料 500円）

（法学科3年 黒柳佳子）

年代もののオルゴールは姿・形も美しい



参考室あれこれ

「それから、福永武彦訳の『出雲風土記』がありますか。シリーズの中の1冊なのですが」。

カード目録にも「本学教員著作目録」にも採録なし。情報がなかと『現代日本執筆者大事典 77/82』をひく。「福永武彦著書目録」が『日本古書通信 第47巻1号』に載っていることがわかった。書庫から取り出して見ると、『古典日本文学全集』『日本文学全集豪華版』『日本の古典』に収録とわかった。カードをひき直すと、本学では『古典日本文学全集』のみ所蔵。第1巻のカードに、『風土記』『日本霊異記』『古代歌謡』と記されている。だが、『風土記』の訳者は倉野憲司であり、福永武彦は『古代歌

謡』の訳者となっている。その旨を告げると、「福永武彦訳の作品も確かにいっしょに入っていた」ということで調査は終了。

記憶は、とかく断片的であったり、思い違いがあったりする。しかし、ヒントがその中にあり、調査の重要な手がかりとなる。手がかりから問題解決へ導くための有力な武器となるのが、「書誌」(本探し、文献探しのツール)である。「昭和23～24年頃読んだことがある、ヴァン・デ・ヴェルデの『結婚……』という本の正しい書名を知りたい」という依頼の時も、『出版年鑑 昭和22-23年版』によって『完全なる結婚』のことであると確認できた。書誌は高価なものが多いが、末代まで使える。図書館サービスにとっては、必需品である。(参考係 久保田安子)

あれを見る、これを聞く。シュンのビデオとセミナー

●「来ぶらりビデオ」

前期放映は(4-7月)、7月5日をもって無事終了しました。ビデオコーナーを利用いただきありがとうございました。後期放映は、再び10月から始まります。放映日・内容は、前期同様です。土曜映画会に関しては、「スターウォーズ ジェダイの復讐」などを予定しています。漫画研究部製作のすばらしい立て看板も、またお楽しみ下さい。火曜日放映に関しても、より興味の持てるテーマを設定して放映する予定です。ただし、この放映枠の使用法に関しては、一部変更もあり得るかと思えます。今後、お知らせなどにご注意ください。

●「来ぶらりセミナー」

第3回セミナーは、10月4日(土)「資料としての新聞記事」をテーマに実施します。時間：午後1時30分～3時30分。会場：図書館3階会議室。先着20名。会費100円。2階カウンターで受け付け中です。

第4回セミナーは12月6日(土)、テーマは「和綴じ本の作り方」。時間、会場とも前回と同じです。当セミナーでは毎回、参加者のみなさんに実際に和綴じ本を作っていただいています。ご期待ください。

お知らせ

短かった今年の夏も終わり、キャンパスに見なれた顔が帰って来ました。タツプリ遊んだ顔や会社訪問でやつれた顔。ひと夏を越えると、人の表情も変わって見えるのが不思議です。やがて落葉の季節となり、図書館の風景も、着実に秋色に変わって行きます。

○大学祭期間中は休館の予定です。

10月30日(木)から11月4日(火)まで、例年どおり図書館が展示会場となる場合は休館いたします。ご了承ください。

○閲覧室が少し明るくなりました。

1階及び3階閲覧室の、天井の高い所に、蛍光灯を増設しました。全体的にはまだ“暗い”イメージが残りますが、少しずつ変わると思います。

来ぶらり No.15 1986年10月1日発行

発行責任者：森永 毅彦 編集委員：中野里美 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221